column

コロナ禍の災害

41年勤めた消防本部を昨年3月に定年退職し10回ほど県外へ出かけた。防災関連の学会や役員を務める競技団体の会議等に出席し、その足で古寺巡りや座禅体験、心身が癒される感覚が心地好い。特に弘法大師空海が1200年前に開いた天空の聖地高野山、静寂に包まれた奥之院に感銘を受け、二度訪れた。

しかし今年に入り、研修やスポーツ大会は全て中止、会議は書面やオンラインに変わった。退職前から計画していた震災9年目の被災地視察を兼ねた三陸鉄道の旅は取りやめた。

私たちの日常がこんなにも脆く急激に崩壊するとは想像出来なかった。今、世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染拡大。国内で初めて患者が発表されてから数か月で緊急事態宣言が発出され、「三密」「ソーシャルディスタンス」「ウィズコロナ」等の新しい言葉も生まれた。人々の動きを止めれば感染拡大は防げるが、緩めると再び感染が拡大する。目に見えない恐怖との戦いと共存はいつまで続くのか、人と人を遠ざけてしまう感染症の怖さを痛感している。専門家によるとウィズコロナの時代はしばらく続くそうだが、国内外を自由に行き来できる普通の日常を取り戻すことを切に願うばかりだ。

■複合災害

現在の状況から想定される複合災害について話してみたい。複合災害とは二つ以上の災害が同時期または復旧の途中で発生することである。

「天災は忘れた頃にやって来る」をご存じだろうか。情報伝達のスピードや災害多発時代の現在ではあてはまらないとの声もあるが、これは明治～昭和の時代に活躍した物理学者で随筆家の寺田寅彦が残した日本で最も有名な自然災害への警句である。

寺田は、1932年著書『津波と人間』で、コロナ禍の中で苦悩する今日の私たちへの警告とも取れる言葉も残している。原文「困ったことには自然は過去の習慣に忠実である。地震や津波は新思想の流行などには委細かまわず、頑固に、保守的に執念深くやってくるのである。」解説すると、自然災害は世の中がどのような状況下であろうが、頑固にも定期的に確実にやってくるということだ。今年7月熊本県を中心に発生し、多くの犠牲を払った「令和2年7月豪雨」も複合災害と言える。1771年石垣島や宮古島で約1万1千人が犠牲となった「明和の大津波」では、赤痢が蔓延したと伝えられている。

災害大国である日本では歴史的に見ても多数の複合災害が発生している。奈良の大仏の造立は地震災害と感染症（天然痘）の複合災害から立ち直るための復興対策であったことは有名である。日本の歴史を振り返ってみる。

734年　畿内七道を揺るがす大地震が発生
735年　天平の大疫病（天然痘と思われる疫病が大流行し総人口の3割前後が死亡）
747年　奈良の大仏造立（災害や疫病からの復興対策）
…
863年　越中・越後地震（都でインフルエンザと思われる疫病が蔓延する）
864年　富士山が大噴火
869年　貞観地震（東日本大震災と同規模の地震津波被害）
887年　仁和地震（南海トラフ三連動の大地震）
…
1854年　安政東海地震（南海トラフの東側半分で発生）
安政南海地震（32時間後に南海トラフの南側で発生）
1855年　安政江戸地震（関東地方南部で発生

死者4千人～1万人）

1856年　安政江戸台風（10万人が死亡、国内の風水害では最多）

1858年　コレラが流行（江戸で3万人死亡）

人類の歴史は感染症との闘いの爪痕が多く刻まれている。大規模な感染症拡大や自然災害は、世界の歴史と密接な関係があるようだ。グローバル時代の今日では、更にスピードアップし拡大していくことは容易に想像できる。

日本は世界の0・25％という国土面積だが、世界で発生するM6・0以上の地震のうち約20％は日本周辺で発生している。地震には、火山性、プレート境界型、海洋プレート型、活断層などがある。プレートとは地球の表面を覆う厚さ100㎞ほどの岩盤のことだが、地球上にある10数枚余のプレートのうち、4枚が日本周辺に分布している。又、世界の活火山は1548確認されているが、日本は108報告されている。活断層は日本全体で約2000あると推定されている。

春夏秋冬がはっきりした日本では、四季折々の風物詩の中にも季節のうつろいを感じられる。近年はその季節の現象が激甚化しているのではないだろうか。毎年、雨量も観測史上最高が続き、台風も強大化し、これまでとは違う進路・規模の災害が起きている。近年は、いつどこで、どんな災害が起こっても不思議ではない状況にある。加えて、南海トラフ地震が発生する確率が30年以内に80％、首都直下地震が70％と大規模地震が切迫している。

日本に暮らす私たちは、災害がいつ発生しても不思議ではない所に住んでいることを認識する必要がある。そのうえで自らを守り、家族を守り、地域を守って行くことを日々の生活の中で知識と決断と行動により乗り越えていくことが肝要だ。これは沖縄も例外ではない。

コロナ禍の中でこれまでの日常が奪われ、感染症の恐怖と戦っている最中、自然界の神様は、そんな酷なことはしないだろうと思いたいところだが、自然災害は容赦なく襲ってくることを事実として受け止め、今一度防災について、家族で話し合ってみてはいかがだろうか。

家庭防災会議の提唱

1. 電池式の携帯ラジオを常に準備する。
2. 家屋の耐震化と家具の固定は地震直後に家族を守る。
3. 自らが住む場所や地域の災害リスクを家族で共有する。
4. 津波避難は到達予想時刻で緊急時と時間的余裕時の二通りを想定する。
5. 津波災害が発生したら、必ず避難すると家族で約束する。
6. 自然災害は、自分の経験だけで判断してはいけない。
7. 防災散歩で危険箇所や避難場所を確認する。

プロフィール

賀数 淳氏

・沖縄大学地域研究所　特別研究員
・前糸満市消防本部　消防長
・沖縄県空手道連盟　副理事長
・沖縄県学生空手道連盟　会長

在職中に内閣府主催の「防災スペシャリスト養成研修」を修了。昨年、全国の自治体職員では14人目の「地域防災マネージャー」に内閣府から認定される。現在は、学校や企業における防災教育、命を守る防災をメインテーマとして講演、研究活動を行う。

防災担当として糸満市役所へ出向中に東日本大震災が発生、被災地へ派遣される。津波災害の悲惨さ、地球エネルギーの圧倒的な破壊力を目の当たりにする。人間は自然災害と対峙してはいけない、逃げることは命を守るための最も大切な行動規範。死者行方不明者84人を出した大川小学校の悲劇は二度と繰り返していけないと、使命感を持って子ども達の命を守る防災教育に取り組んでいる。